



SPACE No.40

日本臨床心理身体運動学会会報第 40 号 2023 年 3 月 31 日

編集発行 日本臨床心理身体運動学会 会長 山中康裕

【第 24 回大会特集号】

昨年度の第 23 回大会（松本大学）に引き続き、2022 年 12 月 3 日 4 日に佐賀（西九州大学）にて第 24 回大会がオンサイト（対面）とオンライン（zoom）でのハイブリッド形式で開催されました。現地にて参加された方も多く、懇親会の開催はまだかかないませんでした。ワークショップ・研究発表・講演・シンポジウムとコロナ前の形を引き継ぎつつ、新しい学会大会の形を模索できたのではないかと思います。そして学会大会だからこそ、そこに見知った顔を見出して旧知を温め、研究発表について、また日常の臨床や教育、研究などについて忌憚なく話ができる場となったのではないのでしょうか。

大会開催に尽力して下さった大会実行委員長をはじめ、発表者の皆さんのコメントを頂きました。

【日本臨床心理身体運動学会第 24 回大会 回想記】 大会実行委員長 太田秀樹（西九州大学）

令和 4 年 12 月 3 日（土）、4 日（日）の 2 日間、佐賀市にある西九州大学佐賀キャンパスにおいて第 24 回大会を開催することが出来ました。これが出来ましたのは、参加して頂いた皆様や実行委員として協働して頂きましたスタッフ、学生たち、そして学会理事長をはじめとした常任理事、理事の先生方に支えられたからです。紙面をお借りし、実行委員を代表して、心より厚く御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

西九州大学で本学会大会を行うことができるようになったきっかけは、私が約 4 年半前、本大学に赴任したからだと思っています。数年前、理事長の高橋先生から、それらしいニュアンスの言葉を頂いておりました。当時軽く返事をしてしまったことを、今私は後悔するとともに満足もしています。後悔は、学会大会を開催するため予想を超えた責任を感じ、負担になったことと、運営が上手く行かず一部皆様にご迷惑をかけてしまったこととあります。何事も完璧に遂行することがどれほど難しいことなのかということ、私には久しぶりに強く感じた時間となりました。

一方で、満足できたことは、私が大ファンである文化人類学者の今福龍太先生に登壇していただくことが実現でき、そして本学会会長の山中康裕先生にワークショップを開催していただいたことでした。両先生には、改めて言うまでもないことですが、それぞれの先生のワールドを展開していただきました。このことが、いまだに私の自慢になっています。加えて、これまでじっくり時間をとって私的に話したことのなかった山中先生とワークショップ前日にお話ができ、質問攻めにあい、少し自己開示せざるを得なくなって追い詰められた体験を味わいました。これで、山中先生の記憶に私が残ったかもしれないと感じています。山中先生が佐賀キャンパスを後にする際、先生が「私の見る限りこの大会は成功だ！」と私に直接言っていただいたことを忘れることが出来ません。

また今福先生ともじっくり話ことができました。初めてお話しした時から、うん十年が経ったので、先生からすると全く記憶のないことでしたが（当然です）、私にとっては遠くに行ってしまう二度と会え

ないと思っていた人に奇跡的再会を果たしたという程の出会いを得るができました。理事長高橋先生とともにご一緒し、今福ワールドに共にどっぷり浸かり、異次元に居ました。今回の大会を担当する機会が無ければ、恐らく私にとって再会は果たせなかったと思います。その機会を与えて下さった、高橋先生にも改めて感謝申し上げます。

いずれにしろ、この大会を開催できたことは私にとって、「こころ」へのさらなる探求心を掻き立て、「さ迷い続けているこの自分でも良いのだ（現実には足をしっかり着けている限り）」という実感を持たせてくれた極めて重要な機会となりました。

次の大会は東邦大学です。松本大学の齋藤先生から引き継いだバトンを、今度は澁川先生にバトンをお渡しいたします。引き続き宜しくお願い申し上げます。

【一般研究発表をおこなって】

宇土昌志（宮崎大学）

2022年12月に開催されました第24回大会にて、一般研究発表をさせていただきました。まずこの場をお借りして、太田秀樹大会実行委員長はじめ、運営に携わった皆様、座長の名取琢自先生、指定討論者の山愛美先生、会場及びオンラインにてご参加いただいたフロアの皆様方、発表を後押ししてくださった中島登代子先生へ厚くお礼申し上げます。

おかげさまで大変貴重な体験をさせていただきました。発表してよかった、というのが率直な感想です。どうよかったか、という言葉にしづらいのですが、一つは今も事例について、ふう〜っと考え続ける、あるいは、考えを広げる新たな鉦脈を拓いてもらえたこと、でしょうか。当日は全然言語化できず、しどろもどろの説明で皆様にはわかりづらかったものと申し訳なく思う自分も多いのですが、それにも関わらず先生方に包まれるような温かさとともに、いくつもお質問や貴重なコメントをいただけて私自身は大変有意義な時間を過ごさせていただいたと思います。

正直、初めての学会発表で、申し込んで以降、寝ても覚めても事例のことを考え、準備をされていて不安になることばかりでした。ですが、あれだけ競技に懸けるクライアントの姿を思い返していると励まされ、そして、このような選手の存在を知っていただきたいという想いが湧いていました。そうした勇気をくれたクライアントにも感謝し、発表を終えて、あらためて大事にしていきたい事例であると思いました。今回、山先生、名取先生、フロアの先生方に拓いていただいた鉦脈を、いざなっていたいただいたあの場とともに懐に抱いて、今後も研鑽を重ねていきたいと思っています。

あらためて、この度は貴重な発表の機会をいただきましたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。

【事例研究発表という体験をつうじて】

大島希（公徳会 若宮病院）

2022年12月佐賀県の西九州大学で開催されました第24回大会で「発達障害の娘をもつ母として、発達障害をもつ当事者として」とのタイトルで事例研究発表の機会を頂きました。本学会での発表は、2015年に一般研究発表をさせていただき2回目でした。また、原稿を書く機会もいただけたことは、なぜこのケースを、と考えたか振り返る機会にもなりました。

1年の延期をへて実施された23回大会後に次は発表をしようと胸に秘め、いくつか候補に考えていた事例がありました。その中で今回の発表事例でいこうと決めたのは8月中旬の演題募集のお知らせを読み、この方の事例がなんとなく頭にでてきたからでした。最初に出会って10数年のカウンセリングは、社会的制度や状況の変化だけでなく、発表者自身も、所属先・職種・職名の変更など背景が動いていく中で継続をしていた経過でもありました。この方と関わり始めた時期は個別のカウンセリングの機会や経験がほとんどなく、いかに関わるかに苦心していました。この方からは「人と関ることのむずかしさ」「過敏さの中でどのように関わり、共に過ごすことができるのか」「どのような体験を蓄積できるとよいか」「(相手に)伝えている言葉と(本当は)伝えたい言葉、その不一致の中です

ごされてきた生活上の大変さ」などの体験について教えていただけていたように思います。

近年の新型コロナウイルス感染症対策による制限の中で、対面式の事例検討だけでなく山形県外にすることは、発表者にとっても3年ぶりの非日常的な体験でした。変に楽観的で、現実感のないふわふわとして（意識と感覚のズレという意味で）よくない意味で“かかっていた”“入れ込んでいた”状態だったと思い返します。いち早く会場に入り、時間が近づき、遅ればせながら落ち着かなくなりました。実際、発表資料の作成や確認をしていたプレゼン資料にミスがあったこと、前提となる背景を伝えていないこと、それに自分でも気づかずにいたこと、などなどには自分で自分に驚いていました。オンラインで参加していただいた方のチャットもみえていながら、反応できずに申し訳ありません、頭の中はテンヤワンヤでした。そんな中で座長を務めていただいた榎山春香先生、指定討論者の中島登代子先生、岸本寛史先生の姿が視野にはいるようになり、姿勢の動きや仕草や声かけ、など雰囲気や所作からは大きな支えをいただきました。また、結晶化しきなかった不具合で閉じこもろうとした心をフロアからいただいた発言やコメントから触発されることでほぐしていただきました。本学会での事例研究発表の場は、(数秒間の沈黙が無限に感じる)ミュート・画角や視野の限定されるオンライン空間でなく、対面式で実施していたからこそその体験と感じています。

関係の蓄積、世の中といかにつながりを作っていくかという課題に取り組んできた事例と私の中で考えていましたが、コロナ禍の社会情勢の中だったからこそ、私自身も関係性や『つながり』を含めた体験自体ができる場と機会の大切さを再認識させていただきました。この場で、このタイミングで、人と関ること、場に支えていただく力を味わうことができたのは大きな体験でした。また、発表者自身の中の課題として、文章化していくことにもっと意識して取り組み、次の機会には、違った姿をおみせできるようにしたいと考えております。

最後になりますが、全国的な第8波の中で、本大会の実施にむけた様々な課題に対する調整や準備、なみなみならぬご苦労があったものと想像しています。その中で、当日の舞台を整えていただいた実行委員の先生、西九州大学の関係者の皆様、会場やオンラインで参加していただいていた皆様に、非常に深く感謝をお伝えできればと思っています。

ありがとうございました。

編集後記

コロナ禍をようやく乗り越え、コロナ後へ移行していこうとしています。学会大会もオンサイトだからこそそのディスカッションや講演、シンポジウムが出来るようになってきました。5月8日には5類へ移行する予定で、3月13日からはマスクの着用も個人の判断に任されるようになりましたが、まだ多くの方がマスクを着用しています。コロナを経たことを今後どのように考えて、その経験を活かしていけるのかは、一人一人に委ねられています。それを共有するためにも、SPACEや学会誌への寄稿などをお願いします。

(仁里)

SPACE No. 40
日本臨床心理身体運動学会 会報第40号
2023年3月31日発行
日本臨床心理身体運動学会
会 長 山中康裕
編集責任 仁里文美
事務局 〒600-8449
京都市下京区新町通松原下ル富永町107-1
株式会社 木立の文庫内
TEL : 075-585-5277
FAX : 075-320-3664
E-mail : office@rinsinsin.jp